

# 艦隊 勤務

Belfast Diary.



ADULT  
R18  
ONLY



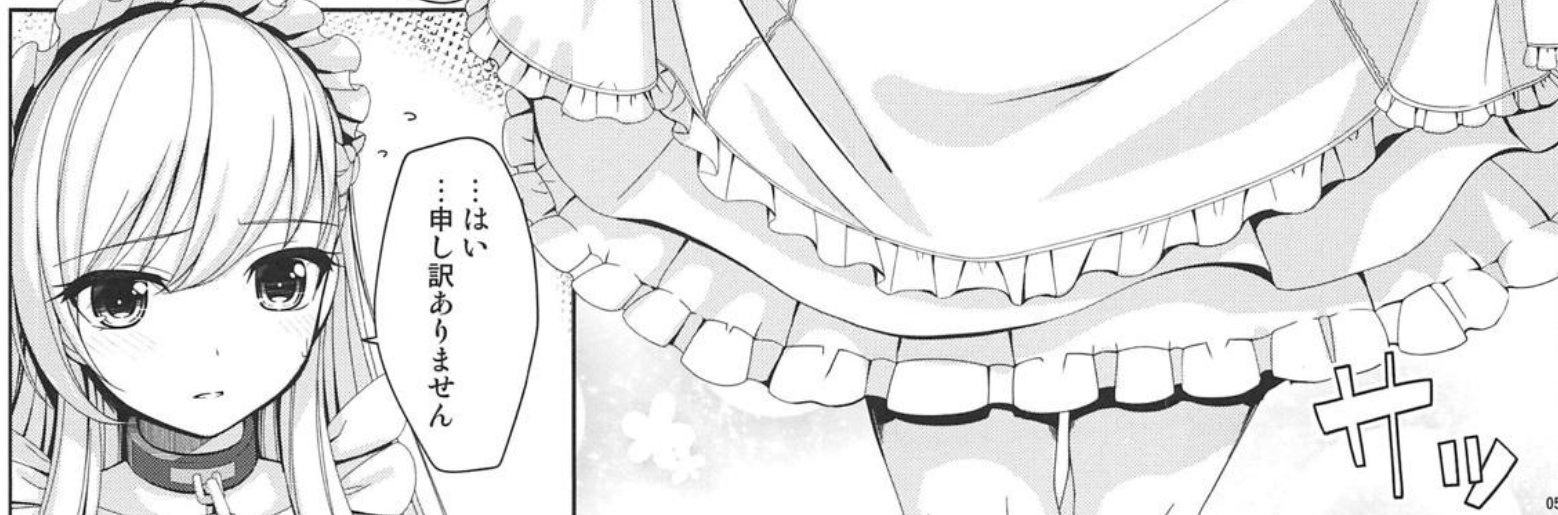
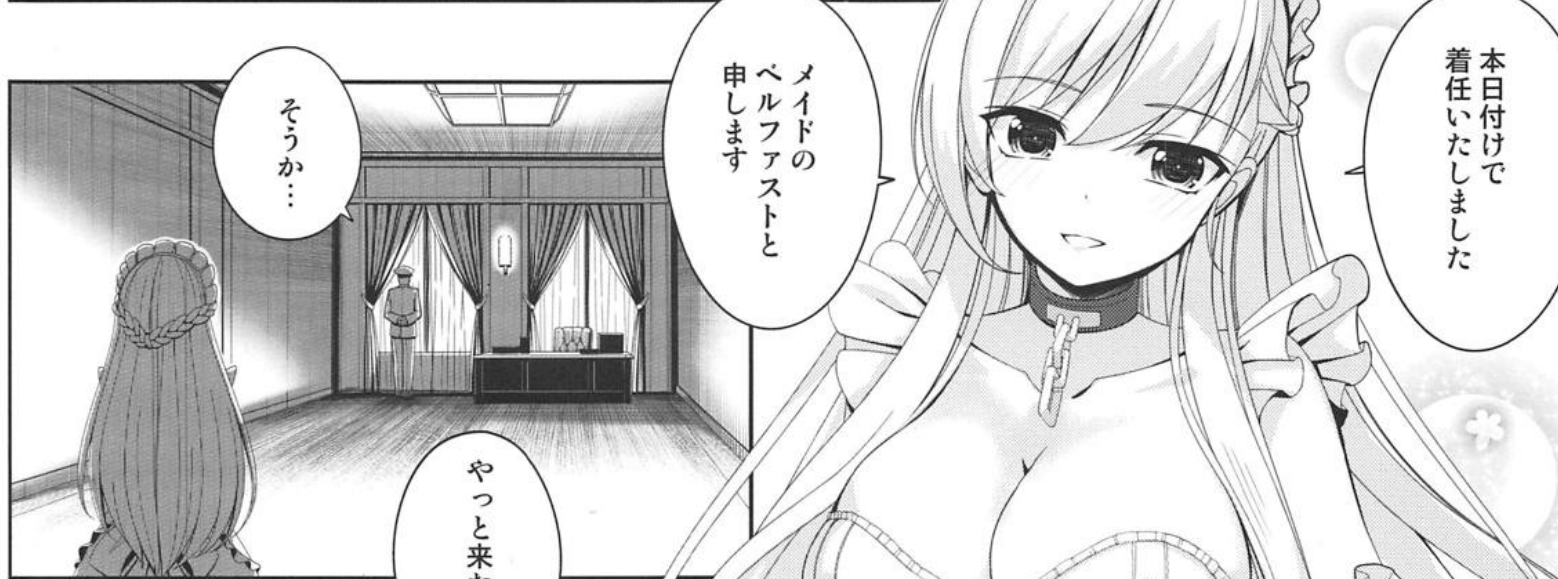
艦隊  
勤務





勤艦  
務隊







メイドと聞こえたが…

さて…君はいつたい

どれほどのものだといふかね…?

ッ…!  
ヒッヒッ



用務のほうにはまだ少々不慣れでございますが最善をつくしますので何卒ご容赦くださいませ…

ヒッヒッ…



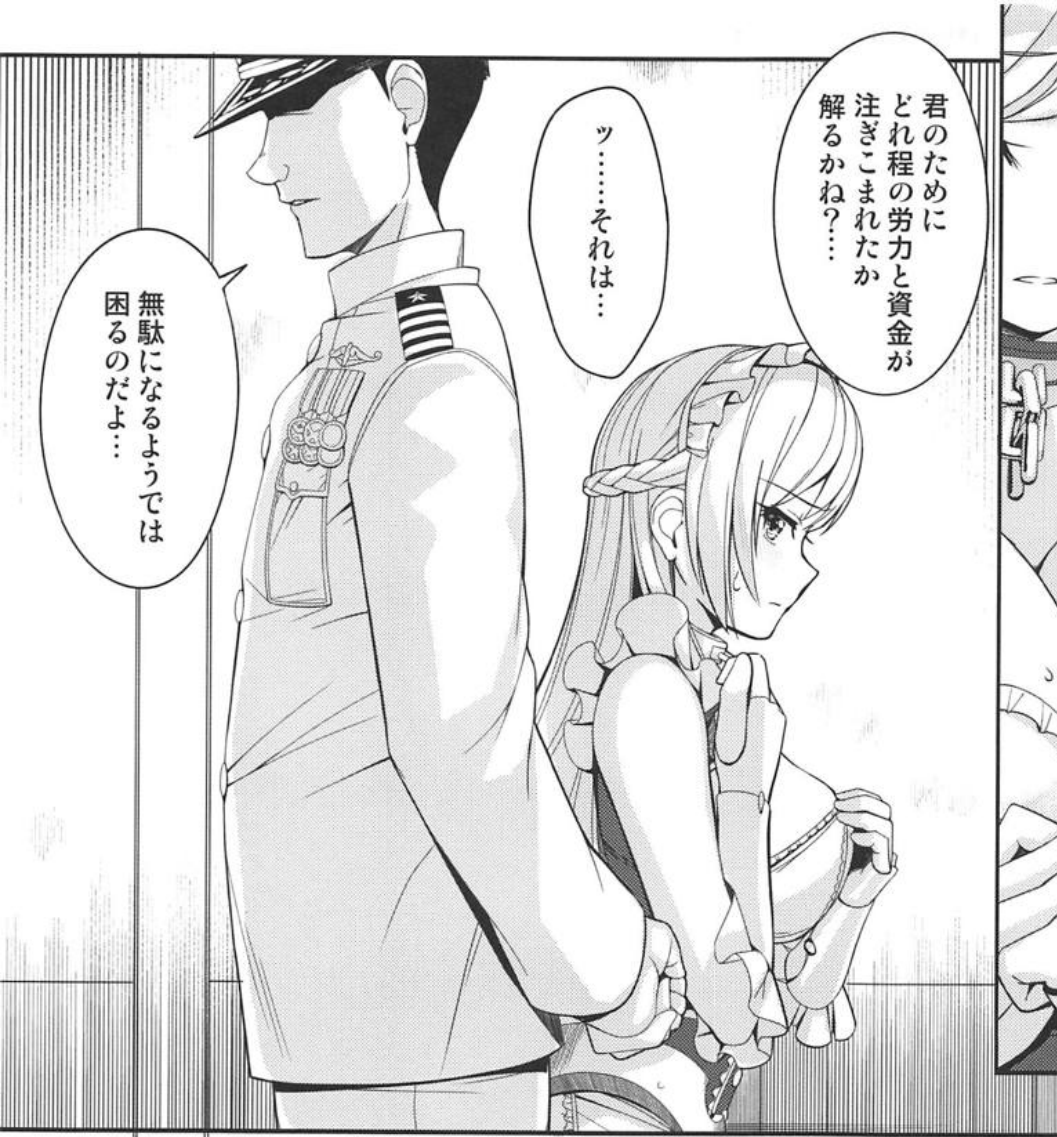
…ご主人様にご奉仕する身とはいえ不用意に触ることは自重くださいませ…

ツ…?!

ヒッヒッ

ヒッヒッ





無駄になるようでは  
困るのだよ…

ツ……それは…

君のために  
どれ程の労力と資金が  
注ぎこまれたか  
解るかね？…



果たして  
使い物になるのか…  
試してみないことには  
解らないからな…

ツンッ  
んっ！

ゴッゴッ



ツ…!?

してもらわなくてはね…

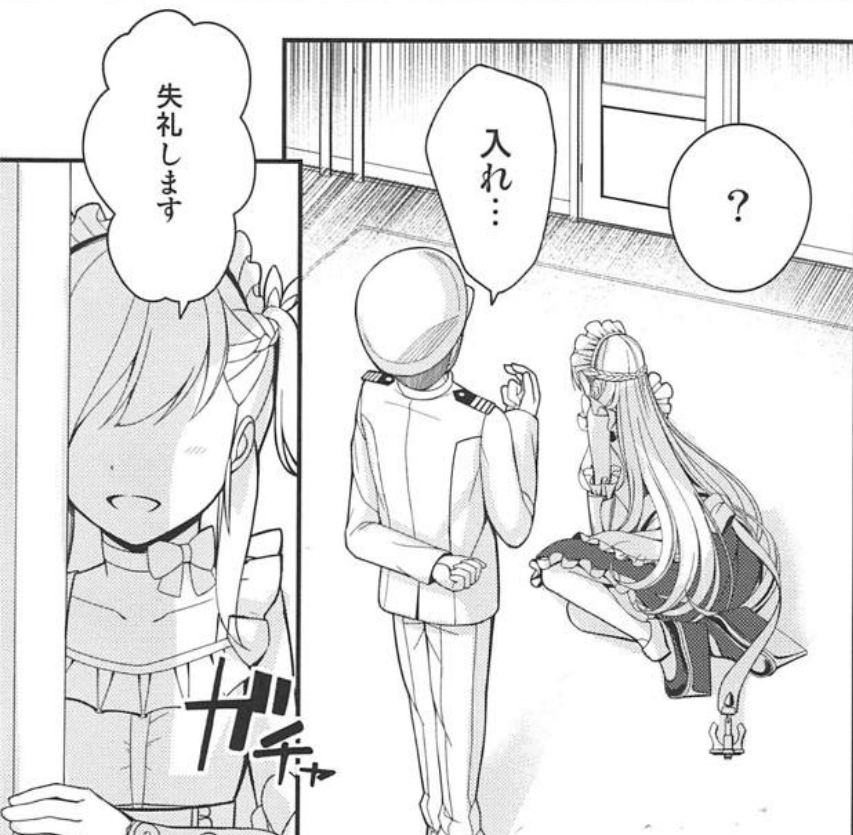
△キョ



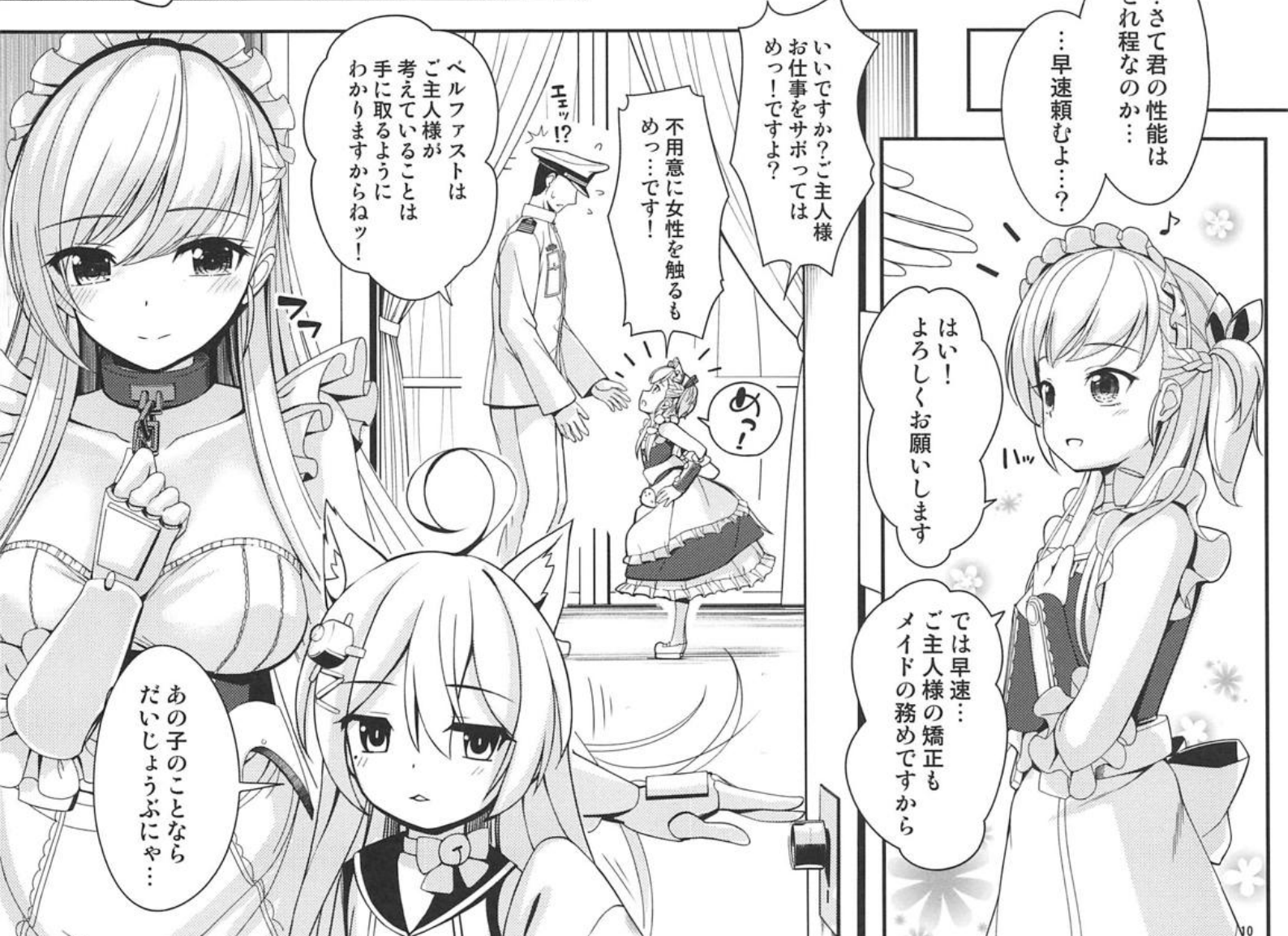
君には  
それなりの仕事を…

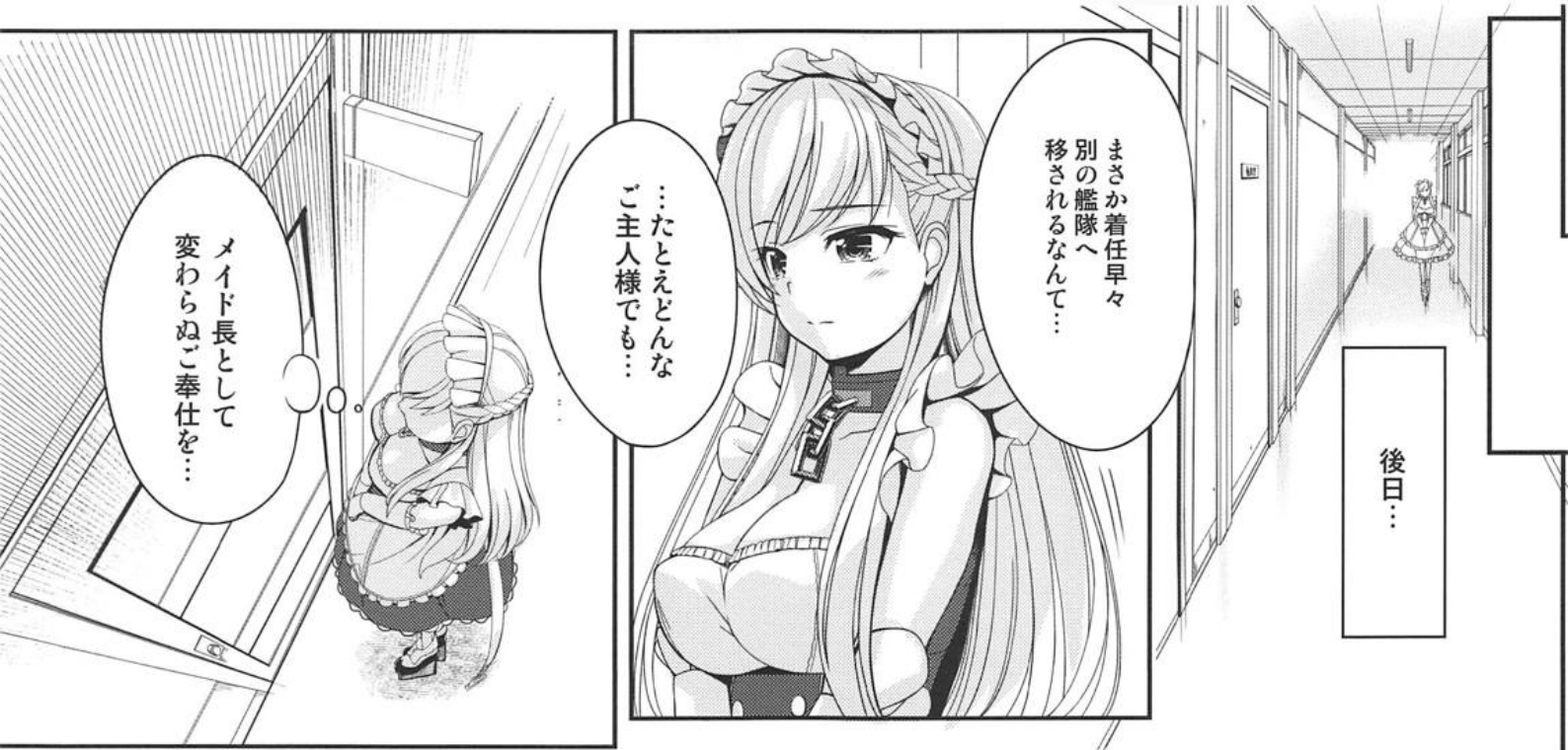




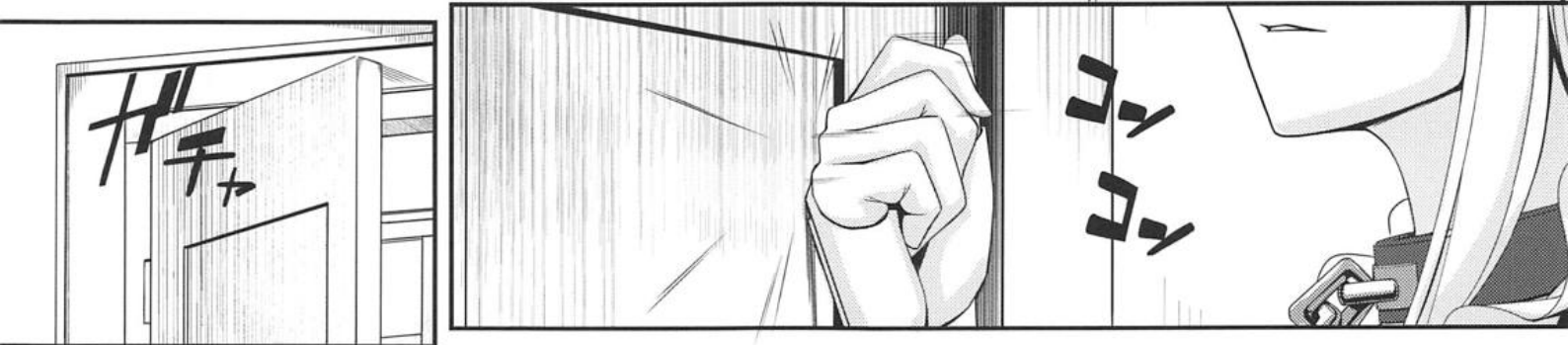








後日...





ツ…大変失礼  
いたしました…

部屋を  
間違えました…

？

あッ…!?

うひひひ…  
ダメですよ  
指揮官様♡

あんツ！  
指揮官様ツ！

…ねえツ！  
ちよつとまつて!!

この御方が…

いいところに  
来てくれて  
助かったよ…  
ベルファスト…

ご主人様…？

ベルファスト？



指揮官なら少しは  
皆の功をねぎらって  
欲しいものだがな...

そんなに  
敵を塵殺  
したいのか？  
...皆連戦で  
疲れているのだ...

みんな新しい  
任務だッ！

ほらみんな  
もう悪ふざけは  
おしまいだよ！

装備を整えて  
出撃の準備を！  
旗艦は加賀に...

うう...だけど  
さっきのよう  
なこととは...



それでしたら  
委託の手配を...  
お嬢様方には  
演習を...

...ツ  
そうだね  
それで...



それでしたら...  
大鳳と指揮官様の  
二人きりで演習を  
お願いしますわ

さあ...  
先程の続きを...

指揮官様がよろしければ  
実戦でも構いませんわよ？

ああッ...!  
いや...  
それは...ツッ!





ご主人様？

演習でしたら  
ロイヤルメイド隊が  
ご主人様に代わって  
いつでもお相手  
いたしますが：

皆様大変  
お疲れのようなので：  
しばらく寮舎にて  
休暇をお与えになつては  
いかがでしょうか？

そうですの！  
だから大鳳は指揮官様に  
癒していただかないと：

寮舎の設備は十分に  
整っておりますので  
ご主人様の手を  
煩わせる必要は：

あらそうかしら...？  
なんだか物足りない  
気がしますわよ...？  
せっかくなので新しい設備を  
指揮官様と一緒に：

ッ...！  
ちよっと...  
二人とも...

失礼します...  
新しい任務が  
通達されま：

任務なら委託に...！

...申し訳  
ございません

出撃をお願い  
いたします...

他のお嬢様方は皆様  
お出かけになられて  
おりますので：

そんな...

ホ...



はあ…  
やっと落ち着いた…

助かったよ  
ベルファスト…

いつも  
こうなんだ…

ご主人様  
ご奉仕するのが  
メイドの務めです…

しかし  
ご主人様…

優秀な  
指揮官になるには  
まず自らに自信を  
持つことから  
始まります…

お嬢様方に  
振り回されて  
いるようでは  
任務に支障を  
きたすことも…

指揮官として  
みんなを率いている  
つもりなんだけど  
彼女達が相手だと  
どうしても僕は  
役不足みたいで…

ご主人様は  
指揮官なのです  
遠慮なさらず  
ご命令くださいませ

今はお嬢様方の代わりに  
私がお相手いたします

これは  
演習でございます

艦隊に  
着任したばかりで  
少々不慣れでは  
ございますが

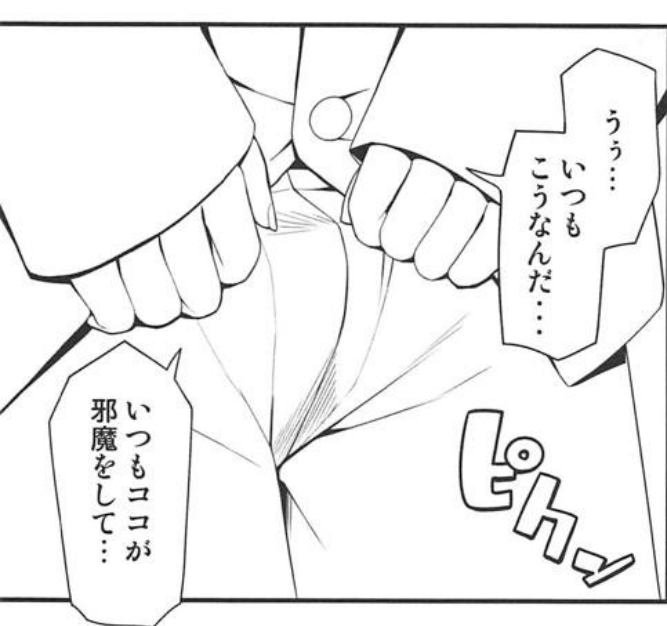
いつも通りお嬢様方と  
なさっているように…

演習…？

えーっと  
それじゃあ…











ふふ...

ええッ!  
もう終わり?  
...まだココが  
収まらないよ...

...そろそろ  
良い頃でしょう...

ご安心くださいませ  
指揮官様...

ズン  
クン



お相手いたしますね...

続きは...こちらで...

にゅぽあ



えっと…

こちらで  
こちらで  
指揮官様

その際には  
お気をつけ  
下さいませ

こちらを具合を  
確かめながら…  
時にはこちらも  
優しく愛でて  
下さいませ

あつ…  
…うん

…どう?

あつ…はら  
お上手でい  
そのままの中へ…



あつ…!  
入る…よ?

そのまま奥まで  
お入りくださいませ…

ピク

ちゅ

ッ!!

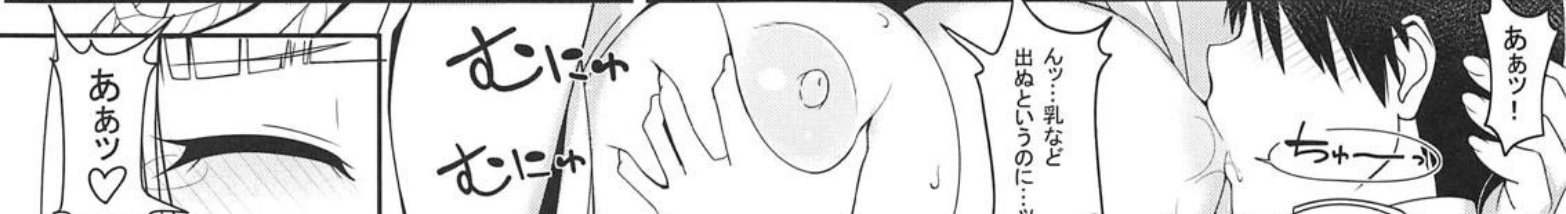
あつ…

ッ

ッ











…ねえベルファスト  
今日もアレのこと  
教えてくれるかな？

うん…  
お勉強に熱心で  
ございますね…  
ご主人様の  
意のままに…

艦隊に着任早々  
一時はどうなることかと  
思いましたが…

それでは  
準備いたしますので  
それまでは…

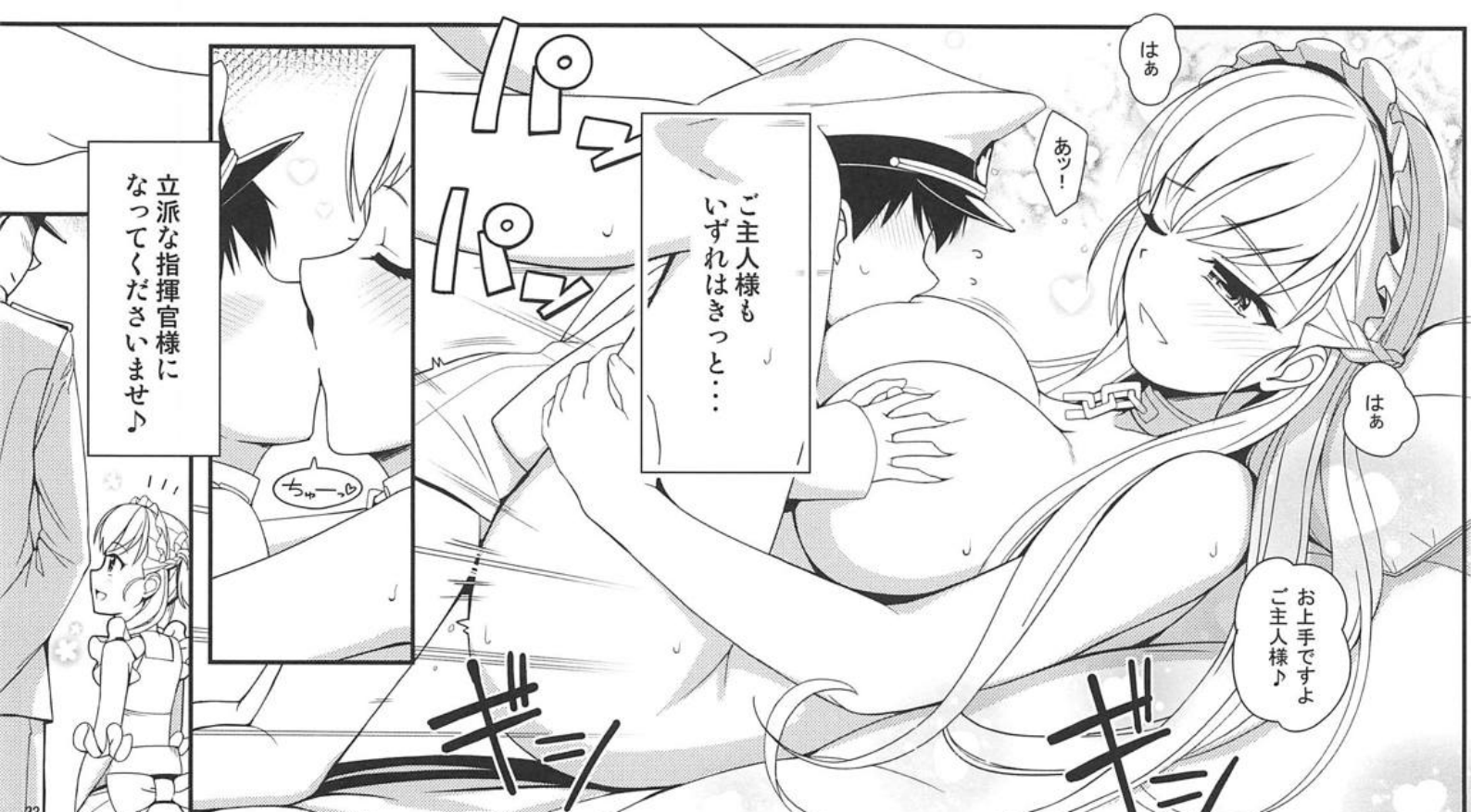
ベルファストの乳を  
ご賞味くださいませ…  
お口に合いますでしょうか？



優秀な指揮官様に  
なられるために  
もつとご主人様に  
ご奉仕いたしますので…

ちゅー

ゴキウ



はあ

あッ！

ご主人様も  
いずれはきつと…

はあ

お上手ですよ  
ご主人様♪

立派な指揮官様に  
なってくださいませ♪

ちゅー

ゴキウ

ゴキウ



指揮官は重苦しい空気に耐えられず頭を抱えて机に座っていた。部屋には赤城、大鳳、愛宕の三人の艦載少女が机を挟んでトライアングル状に立っており、お互いを睨み、罵り、誹謗中傷の応酬を繰り返して、空中に見えない火花が炸裂する中を騒動の原因のなつた彼には何もできなかつた。

見た目からして少年の彼は経験も浅く、女性との関係もほとんどないため、色気を振りまき性的に襲ってくる彼女達に振り回されていた。(どうしてこうなつた)

毎回頭を抱えていて悩んでいるが、問いに答える者はいなかつた。空気を読んだのか、部屋に入ってくる他の艦載少女は皆無だつた、そういえばいつもはうるさい駆逐艦達も今日は見てない。

自然とでてるため息をつきながら、今回の騒動を思い出す。赤城に次の任務を指示するために呼んだことが始まりだつた。

空母赤城 指揮官「〇〇勢は多数いるが彼女は一人で独占欲が強く、さらに嫉妬深く攻撃的。いわゆるヤンデレであり『重桜のやべー奴』と呼ばれていることを知っている。指揮官様、ついに赤城の愛を受け入れてくれますか?」

「そんなつもりで呼んだ覚えはまったくない」

彼女が意気揚々と扉を開けるが、部屋に入る直前に足が止まつた。椅子に座っている私の頭の上に、大きな、大きなおっぱいが占拠しているのが見えたからだ。

「あらく何しに来たの害虫?用がないなら早く帰りなさい、指揮官様は私と忙しいのよ」

「呼んだ覚えはまったくない、豊かな乳房を揺らしながら、持ち主が甘つたるい声で赤城を挑発する。『大鳳!』」

「最近、鎮守府に着任した同じ重桜、同じ空母の大鳳。」

鎮守府最大の胸囲を誇る大きな胸、一説にはメートルサイズとも言われている。赤城は愛が重いヤンデレが、彼女は自分が指揮官の恋人だと信じているメンヘラ、そして自分以外を排除しようとするヤンデレを備えた二人目の『重桜のやべー奴』である。

「その下品な乳は仕舞いなさい」

「貧乳には目毒かしら」

赤城は貧乳とこころが巨乳に位置づけられるぐらい大きい、メートル超えの大鳳相手では相手にならなかつた。

挑発に我慢できずお互いに手を出して髪や乳を掴みながらキャットファイトに発展する二人。頭上で行われる女の喧嘩に止めようとするが、こちらの声は一切耳に入らず、

机の上でおろおろと戸惑うしかなかつた。

「二人を置いて、お姉さんといひ、ことしませう」

「うわあ?」

急に耳元に熱い吐息のこもつた囁きをされ、驚きながら声を掛けて来た方を見ると、いつの間にか入ってきた愛宕が微笑んでいた。

「待ちなさい、この泥棒猫」

「あなたも見かけによらず、油断なりませんわね」

喧嘩をしていて二人が手を止めて、急に入ってきたライバルを牽制する。重巡愛宕、二人と違うタイプながら、頻りに指揮官を誘惑する。

先程の二人ほどの精神的なヤバさはないが、ところかまわず指揮官を誘惑する別の意味で『重桜のやべー奴』に数えられていた。

「でも、アズールレーンにはやべー奴でない方が少なかつた。」

「雌牛はさつさと牧場に帰りはやべー」

「近つかないで女狐、指揮官様にエコノミックアニマルが感染するでしょ」

「あらあら、雌大は鎖で繋がれて外にいるのがお似合いよ」

「いまにも飛びかかろうな勢いで顔を近づけてメンチを切る三人。今更にお互いを避けてられないと思ひ、せめて被害だけは少ないように祈るしなかない指揮官の元に女神が表れた。『豚以外はそろつていますわね、ご主人様』

ロイヤル所属のメイド長ベルファストは、悠然と部屋に入り、指揮官の顔を見るとスカートの端を軽く上げて会釈をする。

「ここは私におまかせを、ロイヤルメイド隊」

「二は、二」

ベルファストの掛け声と共に、ロイヤルメイド隊が現れて睨み合っていた三人に投網を投げ、力づくで捕縛した。

お互いを警戒していた三人はたいした抵抗もできず、グルグルと縄で縛られ連行されていく。『こら、難しなさい!』

「お姉さんは緊縛プレイは好きじゃないわ」

「あの女、邪魔ですわ」

赤城と愛宕が縄から逃れようと抵抗をする中、大鳳はベルファストを睨みつける。だがベルファストは単艦でも力があるうえに、メイド隊の長として君臨されており、いかに大鳳でも手を出すことはできなかつた。恨めしそうに彼女を見てると、あることを思いつく。

「お待ち下さい指揮官様、大鳳が頭の中からあの子を消してみせますわ」

自分の発想に笑顔で浮かべ、これからは起すことを考えながら身体を熱くしていた。

自室に戻った指揮官は着替えをする気力もなく、そのままベッドに倒れ込んだ。いまでも赤城と愛宕の正妻争いはひどかつたが、大鳳の登場によりギリギリの均衡が崩れてひどくなつた。高雄や加賀にも相談はしたが、大鳳を止める存在がない以上、彼女達にはどうすることもできなかつた。

「いまはベルがいるけど、指揮官としてどうにかしないと」

天井を見ながら考えていたが、日頃の疲れから意思とは関係なくまぶたがゆつくり下がり眠ってしまった。

「はあ、はあ、はあ」

「?」

ポタ、ポタ

妙に荒い息と謎の液体が顔に当たり彼は目を覚ます。まぶたを開けると、視界いっぱい頬を赤く染めながら涎を垂ら、熱い吐息を吹きかけてくる大鳳の顔が見えた。

「う、うあああ」

反射的に逃げたそうとしたが、上半身がベッドに縛られており、さらに腰の上に大鳳が跨っている、身体を動かすこともできなかつた。

「おはようございませ指揮官様♡」

大鳳は上体を起こすと腰をくねらせる。大変かわいいな寝顔で、大鳳は襲うのを我慢するのが大変でしたわ」

大鳳の姿が見えるようになって、彼はあることに気づいた。

「胸の形を強調し胸元が見える開いたエプロンドレス、頭のホワイトブリムや鉄の首輪、白のガーターベルト、間違いなかつた、いつも見慣れているベルファストのメイド服を着ていた。」

「お気づきになりました、司令官様の大好きなメイド服ですよ」

大鳳は跨つたままメイド服のスカートを掴み持ち上げて、ベルファストがするような挨拶をした。ただ、スカートを持ち上げたか、ガーターベルトに包まれた、やや太めの太もも、レースのフリルが付いた薄手の扇情的な黒色の下着が見えた。

普段の着物や赤いドレスと、まったく雰囲気の違いが感じられた。

黒髪に白いホワイトブリムは映え、もともと胸のサイズが合わず、着物を崩して着ていた彼女に胸元と肩が露出するメイド服はよく似合っていた。

ベルファストの巨乳をでも大鳳の胸のサイズを収めることができず、服に入り切らなかつた乳肉が左右にはみ出し扇情的な格好になっていた。

「そんな、どうやって」

「ロイヤルから借りましたわ、着慣れませんが似合いますか?」

嘘ではなく半分本当であつた、もともとロイヤルの駆逐艦を齎して強奪に近い形だったので借りたとは言えないが、カタカタ

その時、ドアノブが動くが、鍵が掛けられお開きすることはなかつた。トントン、ドンドン、ドカドカ

扉を叩く音が次第に大きくなつていくが、ドアはびくともしなかつた。『大鳳!そこにいるのはわかっているのよ、今日は私のはずでしょ!』



「部屋のカギ、ですか？うふふ、ご安心ください。大鳳はちゃんと用意してありますから」  
彼女は胸の谷間に指を入れると、そのまま胸の形に沿ってすらし、服を引つけて「一気に下ろした。タプタプン」

鎮守府一の大きな乳房は、窮屈な服から解放されたこと喜ぶように大きく左右に揺れ、谷間に挟まって鍵が落ちた。

大鳳が鍵を入手したのが気になったが、それ以上にその大きな胸に彼の目は釘付けになった。まさに双丘、いや山というべき乳房はその大きさと重さから、重力に引張られた垂れ気味であった。しかしその中心にある色鮮やかなピンク色の乳輪と乳首は、重力に逆らい上を向いて尖っていた。

母親以外では初めて、それも他では見ることのない巨大な乳房に彼の目は釘付けになった。さすがの大鳳も愛しの指揮官に胸をしつと見られるが恥ずかしくないのかモジモジと身体をくねらすと、乳房もそれにつられ動き、まるで生き物のように揺れる。

それを見ていた指揮官のズボンの股間が盛り上がる。  
「まだ子供とはいえずや男性である以上、生理的な反応するのは当然だった。」

「はあ♡この火照り、そしてこのときめき」  
大鳳は自分の股間を押し上げる温もりに身体を熱くする。

「指揮官様の中から、あの虫を排除してあげますわくえっ？」  
ドン！ガツン！

堪えきれなくなった大鳳が襲いかかろうとした時、爆発音と共に部屋が揺れる。  
吹き飛ばされたドアが背後から打つかり、大鳳は声を上げることもできず意識を失った。

「お待たせいたしましたご主人様」  
「ベルファエスト」

砲撃によってドアを吹き飛ばしたベルファエストとロイヤルメイド隊が早足で部屋に入ってきたが、ベッドと大鳳、さらにドアに挟まれた指揮官は素直に喜んだらいいのかわからず、硬い笑顔を浮かべて出迎えた。

「急報を受け駆けつけたベルファエストはいつものメイド服に着替える時間がなく、白の薄いネグリジェに、同じく白のオーバーニソックスとガーシャールベルトの組み合わせだった。」

ネグリジェは布が薄く、肌をおおへず、白いショーツが透けて見えておたり、寝間着といえ感情的な恰好であった。緊急時とはいえず、指揮官に見られることは恥ずかしさを覚え、表情は冷静を装っていたが頬が紅潮していた。

助けられた指揮官は、拘束とドアと大鳳から解放され、今はベッドに座りながらコップに入った水を飲んでいて二人は気絶したままの大鳳と、あの後に駆けつけてきた文句を言っていた赤城と愛宕が、メイド隊に連れて行かれるのを見ながら話をしていた。

「助けられてありがと」  
「主人の危機を救うのはメイドとして当然のことです」

「ドアが飛んできたのは驚いたよ」  
「驚かせてすみません、あの時はアレが最善の方法でした。危険かと思いましたが、」

「ご主人様は大鳳を守ってくれたと信じてました」  
「たしかに身を挺して大鳳は指揮官を守った、ベルファエストが言っているのと少し違うかもしれない気はするが、大鳳をどうするの？」

「しばらくはアルバコアが監視として一緒に行動します」  
「それは、ちょっと、可愛そうな気もする」

「アルバコアに怯える大鳳を知っているだけに、少しだけ気の毒になる。」  
「ドアは壊してしまいましたが、外にメイド隊が交代で見張りますので、ご安心してお休み下さい」

（さて、どうしましょうか）  
会話が落ち着くと、ベルファエストはこの後のことで悩んだ。

新しいドアの発注もそうだが、大鳳、赤城、愛宕の問題をいかに加減なんとかしないといけない。お仕置ぐらいて彼女達が懲りるわけはなく、いまままで変わらず解決にはならない。

一旦部屋に戻ろうとした時に、指揮官の膨らんだ股間を見て立ち止まった。  
大鳳のおっぱいで勃起したペニスにはドア騒ぎで取まっていたが、今度はベルファエストの魅力的な寝巻を見て再び膨らんでいた。

「堂々とした態度で接すれば、彼女達も大人しくなるでしょう」  
「それはそうだろうけど、その苦手というか、怖いというか」

「ご主人様はたしか、女性経験はありませんか？」  
「えっ？え、え、その、はい」

想定とおりの答えを聞き、ベルファエストは指揮官の正面でしゃがむと、ズボンの上から膨らみをやさしく撫でた。  
「な、なに？」「一度経験すれば、女性が苦手なものも克服できるでしょう」

「いや、その理屈はおかしや、やめて」  
「驚く指揮官を無視して、手早くズボンとパンツを下ろす。」

ベルファエストの目の前に、また少年サイズとはいえず立派に反り返ったペニスがビクビクと動いていた。  
まだ皮を被って割けていないそれを見たベルファエストは愛おしく感じた。

「私の姿を見てこうなられたのですね、嬉しい」  
指揮官はペニスを見られたことに顔を真っ赤にして戸惑っている、それを見たベルファエストは微笑みながら言った。  
「私もご主人様から他の女の匂いがするの、少々不愉快ですがお気になさらず」

「ペニスが髪が当たらないように左手で髪をかき上げると、右手で竿を優しく掴み口元に持っていくと亀頭にチュツとキスをする。」  
「そのままだ、チュツと口を何度か吸い始める。」

「今まで感じたことのない、むずかゆい感覚に指揮官は戸惑うしかなかった。」  
ベルファエストは顔を動かして舌で亀頭をきれいに舐めた後、口を開けると亀頭をパクリとくわえ込む。  
「初めは味わう口内はとて熱く湿っており、ペニスを包み込む口淫の心地よさにペニスはビクビクと脈をうつ。」

「はむっ、んっ、ちゅる」  
「奉仕すると下腹部がじんわりと熱くなるのを感じながら、ベルファエストはフェラチオを続けた」

唇だけでなく舌を陰茎にからめながら、前後運動でペニス全体を刺激させながら、  
「ペニスを掴んでいた右手が根本を優しく愛撫する。」

「う、うわあ、なにこれ」  
ベルファエストのフェラチオ奉仕に、指揮官の腰は自然とガクガクと動いた。

「だ、だめ、出る」  
「ベルファエストはそのまま出してよいとペニスを啜えながら、コクリと頭を下げて訴えた。」

「くううう」  
それが合図となり、ペニスから精子が口内に出される。

「ビュル、ビュル、ビュル」  
舌に感じるドロドロとした青臭い苦み、口から鼻を通る独特の匂いがするが、ベルファエストは口内でそれを受け止める。

「勢いは止まらず、射精された精液はベルファエストの口から溢れそうになるが、一滴もこぼさないように躊躇することなく、こくこくと喉を鳴らして飲んでいく。」

「うっ、ううん」  
すべて飲み切ると、射精直後の放心状態の指揮官にパンツとズボンを履かせてベルファエストは立ち上がる。

「それではお休み下さい、ご主人様」  
「う、うん」

指揮官はまだはつきりしない頭で、何度もうなずいた。  
ベルファエストは笑顔で一礼すると、部屋から出ていった。

残された指揮官はベルファエストにフェラチオされたことが頭から離れず眠れない夜を過ごした。  
部屋に戻ったベルファエストはドアに鍵を掛けると、ショーツに手で触る。

指先から伝わる湿りに、濡れている事を自覚すると手はショーツの中に入り指先で膣口をなぞる。  
「やっばり、濡れている」  
空いた手でブラの上から形のよい乳房をやさしく揉み、硬くしこった乳首をつまむ。

「あっ」  
布地からでは刺激が弱いので、今度はやや強く摘む。  
「んっ、んん、はあ」

「なぞるだけでは物足りなくなり膣に指を入れる。」  
肉壁を指でかき回すと甘い快感に身体がビクッと反応し、ヌルヌルとした愛液がショーツに染みを作る。

「はあ、はあ、ご主人様」  
ベッドに倒れ込みながら、ベルファエストも今日の出来事を忘れられず、興奮する身体を慰めながら眠れない夜を過ごした。

\* ア ト ガ キ \*

はじめまして!こんにちわ!  
野村輝弥と申します。

この度は本作品をお手に取っていただきまして  
誠にありがとうございます

アズレン本は初めてでしたがいかがでしたでしょうか?  
獣と軍事聞いて描かずにはられませんのです。

お胸の大きなお船さんたちがたくさんいらっしやるので  
描いていてとても楽しかったです。

まだまだ新しいお船さん達が出てきてくれることを期待しつつ  
機会があればまた描きたいと思いますので  
よろしければまた見てやってくださいませ

それではまた別の作品でお会いしましょう～  
でわでわ

野村輝弥

始めまして、さんますと申します。  
サークル活動はしていませんが、  
たまにネットで二次創作小説を載せています。  
今回は野村輝弥さんのご厚意で、同人誌に載せてもらうことになりました。  
アズールレーンにはかわいいキャラが多くてよいですね、  
特に服のデザインに関してはバラエティ豊かで、  
和服のアレンジも素敵だと思います。  
ベルフェストはもちろん好きなキャラで、主力として使っております。  
二次創作も増えてきましたが、  
TVアニメも放送するので今年は盛り上がると思い、いまから楽しみです。

勤艦  
務隊

Belfast Diary.



# 艦隊勤務

艦隊勤務 Belfast diary

発行日：2019. 04. 29

発行者：野村輝弥

印刷所：小山オフセット印刷所 (同人誌印刷.com)

サークル：Chocolate Pepper. / 童話建設.

@nomu\_tea

<http://chocolate-pepper.sakura.ne.jp/>

勤艦  
務隊

Belfast Diary.